

# 人生山あり谷あり *Life Has Its Ups and Downs*

二〇二一年四月二十一日

バイブル・サービス

遊 佐 重 樹

## コリント人への手紙 第十章十三節

あなたがたの会った試練で世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時にそれに耐えられるようのがれる道も備えてくださるのである。

映画はあまり見ない人でも、ちよび髭に山高帽、コミカルな仕草のチャップリンはご存知だと思います。チャーلز・チャップリンは一八八九年にイギリスで生まれ、俳優、脚本家、映画監督として輝かしい功績を残しました。少し前、彼の残したあることばを聞いた時、心が動かされたので、今日はそのお話をしたいと思います。そのことばとは、このようなものです。

*Life is a tragedy when seen in close-up, but a comedy in long-shot.*

人生はクローズアップで見れば悲劇だが、ロングショットで見れば喜劇だ。

人生山あり谷あり *Life Has Its Ups and Downs*

俳優だけでなく、優れた映画監督でもあったチャップリンならではの視点だと思われれます。人生で起きた個々の出来事に注目すれば悲惨なこと、不幸なことが多いが、人生全体を俯瞰して見れば笑い話のように感じられるもの。また辛い出来事も時間が経てば笑い話として受け止められる、ポジティブに受け入れられるという意味でしょう。波乱万丈だった人生を振り返って思う、意味深いことばだと思います。

チャップリンは一歳のとき両親が離婚。彼が五歳のとき、役者だった母が声が出なくなり、母の代わりにチャップリンが舞台上に立ち、歌を歌い喝采を浴びました。それが彼の初舞台でした。母はその後精神を病んで入院し、彼は孤児院や施設を転々としながら、床屋、印刷工、ガラス職人、新聞売り、役者と職業を変えました。やがてアメリカの映画プロデューサーの目に留まり、一気に人気者になり、数々の名作を発表していきます。しかし、第二次世界大戦後、作風が共産主義的と非難され、活躍の舞台であったアメリカを去ります。晩年はスイスで静かに余生を送り、一九七七年のクリスマスにこの世を去りました。才能にも、運にも恵まれながら、決して平坦でなかったチャップリンが人生から学んだ、深い洞察力、そして人生観を感じます。

チャップリンほど波乱万丈の人生ではないものの、凡人の私でも半世紀以上も生きているとそれなりのささやかな悲劇や喜劇がありました。これまでにやらかした失敗は数知れず、基本的に楽天家の私でも、もはやこれまでか、と思ったことは何度もあります。

自分の失敗をお話するのは勇気がいりますが、それでも長い年月を経て、私も過去の自分を少し客観的に眺めることができるようになり、ほろ苦くも懐かしさを持って、若く未熟だった自分を許してやりたいと思っています。

私は北海道函館市で生まれ、高校を卒業するまで函館で過ごしました。函館はかつては外国の領事館があった関係で異国情緒のある街です。小さい頃から周りの外国人の神父様たちと交流があったこともあり、私は早くから広

い世界に飛び出すことに憧れていました。

三歳年上の兄が関東地方の高校に進学したことも影響され、私も地元を離れ都会の高校に進学する夢を持ちました。意気揚々と受験したものの、敢えなく不合格。目の前が真っ暗になり、絶望のどん底に落ちました。地元の高校は全く受験していなかったので、慌てた親や先生の計らいで急遽二次募集をしていた定時制の高校に行くことになりました。

仕方なく通うことになった定時制の高校は私が初めて知る世界でした。私と同世代の人たちが日中働いて、夕方高校に駆けつけ、夜九時まで四コマの授業を受け、四年間かけて卒業するのが定時制です。職場から駆けつけた生徒たちの多くは作業着姿で、印刷工場の仕事で手がインクで染まっていたり、美容師の見習いの生徒はハサミによる傷だらけの手をしていたり、自衛隊の人たちは汗まみれで汗臭かったりしていました。自衛隊ではわずかに給料が支給されていたようですが、その中から実家に仕送りしているクラスメートもいました。

夕飯を食べる時間もない生徒たちに毎日菓子パンと牛乳が支給されました。食べ盛りの生徒には到底物足りない量ですが、欠席者がいて余ったパンは皆で分け合って食べました。そして昼間の仕事の疲れが出て睡魔と闘いながら必死に勉強する姿がそこにはありました。彼らに注がれる先生たちの視線は温かく、時には豪快に叱り飛ばしながらも和気藹々とした雰囲気教室には満ちていました。

私の家も子沢山で豊かではない生活でしたが、その日の生活に困ることはなかったので、自分がいかに恵まれた境遇であることか思い知りました。そして何の根拠もない自信をもって都会の高校を受験したこと、確たる展望もないのに広い世界に憧れた甘く幼稚な我が身が恥ずかしくてなりませんでした。

翌年、私は受験をして、同じ高校の普通科に入りました。実は翌年も懲りずに再度関東の高校を受験したのです

が、結果はまたもや不合格でした。今度こそ準備もして自信があつたのになぜ？しかしその意味が分かるのはずっと後になってからです。

そこから三年間、私はごく普通の高校生活を送るわけですが、定時制で過ごした時間を忘れることはありませんでした。あの時間は私にとって必要な時間でした。あの時こそが、私にとって本当の意味での「学校」であつたと思つています。十五歳の私にはこれ以上ない悲劇でしたが、後に教員になつた私にとっては神様からいただいたかけがえのない経験になりました。

私は高校卒業後、自立して地元を遠く離れ、以後自分の力で生きてきた、つもりでいました。が、振り返れば誰かのお世話になつてばかりです。私に運があつたとすれば、人生の分岐点に必ず助言してくれる人がいたことだと思ひます。いつだったか聞いたことがあります、神様は人間が間違つた方向に行かないよう、人の姿をして辻辻に立っているのだそうです。その人の助言を聞くも聞かぬもその本人次第。その助言を聞かなければ、その人間の運もそこまで、ということでしょう。人生の早い段階で失敗をいくつも重ねた私は多少なりとも聞く耳を持つていたということでしょうか。大きく進路を変えようとしている時、中には私の翻意を促そうと本気で反対してくれた人もいました。結局のところ、私は自分の意思を通すのですが、反対してくれたおかげで胸に手を当てて、これは本当にやりたいことなのか自分に問うことができ、覚悟を固めることができたので、本当にありがたいことだつたと思つています。

今は混沌とした世の中で、誰もが漠然とした不安に包まれています。毎日生きるのも辛いと思つている人も多いことでしょう。私は自分の失敗自慢をするつもりはありません。が、失敗しても絶望することは決してないと思つて体験しました。昔の悲劇を笑いながら語れる日が必ずやってきます。人生は甘く、ちよつとほろ苦い、けれ

ど上質な喜劇みたいに後味は楽しいものです。生きてみる価値はあります。

さて、二度同じ高校受験に失敗した私でしたが、その意味を悟ったのはそれからずっと後のこと。結婚することになったとき、何を思ったか唐突に母から言われた一言「あの高校に行っていたら、真紀子さんとは出会わなかったね。」はい、ごもっともであります。結婚は神の計画ですからね、母上。思えば、受験失敗でおろおろしている最中も、母は特に慌てるでもなく説教するでもなく、いつもと変わらぬ様子でした。もしかして母は未来を予見していた？ 聞くこうにももう天国に行ってしまったので、叶わないのを少し後悔しています。多分母は、息子より神様を信じていたのだと思います。

この妻には、彼女の大切な洗礼の時に、カメラにフィルムを入れ忘れたこと、アメリカ留学中に大学出願に必要な試験を受けるために出かけて道に迷い受験できなかったことなど、何度も大泣きさせる事態を引き起こし、私的やらかしの歴史は果てしなく続くのですが、その話はいずれまた別の機会に。ひとつ言えるのは、人生というのは、優しいもので、一つひとつの小さな悲劇をいつの間にか懐かしい喜劇に変えてくれるということなのです。

学生の皆さん。あなた方の人生はまだまだ続きます。ロングショットで人生を見られるようになるには、数々の試練が待ち受けています。でも聖書にあるように、神様は耐えられない試練は与えないものです。知恵と勇気を持って、辛い時は誰かの力を借りながら歩いていきましょう。亡きアメリカのホストマザーは失敗して落ち込む私によく言ってくれました。It's not the end of the world! 皆さんも悲劇に見舞われたら思い出してくださいね。

(人間発達学科教授)